
DEVGRU RED TEAM

ぶっとび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEVGRU RED TEAM

【Nコード】

N7220Z

【作者名】

ぶつとび

【あらすじ】

海軍の対テロ特殊部隊DEVGRUに所属する、アルバート・ハスキー少佐。ハスキー少佐率いる精鋭チーム「RED TEAM」の、世界での活躍を描く！

RED TEAM（前書き）

前書き

自分は最近小説を読み出したので、まだ三冊しか読んだことがありません。全く小説に関して初心者である自分が書いた作品です。初心者で小説のルールなども分からないまま書きました。無料で書き放題なので、自分の好きなような感じです。だから、はつきり言ってしまうとめちゃくちゃだと思います（笑）一応内容は、自分も好きで多少知識のある、特殊部隊などそっち系統です。最後まで読んでくれた人には、遠い場所から心の中で物凄く感謝させて頂きます（笑）

RED TEAM

前書き

自分は最近小説を読み出したので、まだ三冊しか読んだことがありません。全く小説に関して初心者である自分が書いた作品です。初心者で小説のルールなども分からないまま書きました。無料で書き放題なので、自分の好きなような感じです。だから、はつきり言ってしまうとめちゃくちゃだと思います（笑）一応内容は、自分も好きで多少知識のある、特殊部隊などそっち系統です。最後まで読んでくれた人には、遠い場所から心の中で物凄く感謝させて頂きます（笑）

プロローグ（前書き）

2011年2月7日 21:37

アルバニア エシュコバルホテル

ブラックマーケット組織の構成員、パシュコは、右手にアタッシユケースを持ち、頭には包帯を巻いた姿で、ホテル5階の薄暗い廊下を歩いていた。パシュコはホテルの507号室で、組織の幹部で資金援助をしているカストール・ビウスと約束をしていた。しかし約束の時間は17時であった。パシュコが大幅に遅れた理由は、ホテルに向かう途中に、事故を起こしてしまったからである。パシュコは怯えている。ゼウスは自分を苛立たせる人間は片っ端から殺すような人物で、そして今、ゼウスは苛立っている。パシュコは良い言い訳が思いつかないまま、507号室の前に到着した。覚悟を決めて、パシュコは恐る恐る扉を開けた。

「ビウスさん…？」

扉を開けると、茶色のソファアに腰掛けたゼウスがいた。目の前の机には、ワイン、チョコレート、時計、そして拳銃。

「来たか！パシュコ！何、ほんの5時間待っただけだ」

ゼウスは皮肉を言うと、机にある茶色の箱に入った八つのチョコレートのうち、一つを手に取り口にした。パシュコは拳銃で撃たれないことを願い、遅れた理由を話した。

「すみません、ゼウスさん。実はトラックで事故を起こしてしまっ

て、でも弁償はしま」

パシユコが話し終える前にゼウスが口を開いた。

「お前の給料じゃ！二百年以上かかる、貸せ」

パシユコは言われた通り、恐る恐るアタッシユケースゼウスにわたした。ゼウスはそれを手に取り、中身を取り出した。

「純兵器級プルトニウムだ、金で買えるような物じゃねえ。お前は俺達がこれを手に入れるのに、どれだけの廃棄潜水艦を探したと思ってるんだ！」

ゼウスはそう言う、机の上の拳銃をとりパシユコに向けた。ゆっくりゼウスは近づき、銃口をパシユコの眉間にあてた。

「この組織はバカばかりだ」

ゼウスはそう言う、左手に持っていたプルトニウムをパシユコの目の前に持ってきた。

「これが無事だった、それに今日は特別な日だ。だから見逃してやる。出ていけ」

パシユコはホツとし扉を開けようとした時ゼウスが、

「しかし、トラックは弁償だ、お前の給料から引いておく」
「分かりました」

パシユコは部屋を後にし、足早に去っていった。

ブローグ

2011年2月7日 21:37

アルバニア エシュコバルホテル

ブラックマーケット組織の構成員、パシュコは、右手にアタッシユケースを持ち、頭には包帯を巻いた姿で、ホテル5階の薄暗い廊下を歩いていた。パシュコはホテルの507号室で、組織の幹部で資金援助をしているカストール・ビウスと約束をしていた。しかし約束の時間は17時であった。パシュコが大幅に遅れた理由は、ホテルに向かう途中に、事故を起こしてしまったからである。パシュコは怯えている。ゼウスは自分を苛立たせる人間は片っ端から殺すような人物で、そして今、ゼウスは苛立っている。パシュコは良い言い訳が思いつかないまま、507号室の前に到着した。覚悟を決めて、パシュコは恐る恐る扉を開けた。

「ビウスさん…？」

扉を開けると、茶色のソファアに腰掛けたゼウスがいた。目の前の机には、ワイン、チョコレート、時計、そして拳銃。

「来たか！パシュコ！何、ほんの5時間待っただけだ」

ゼウスは皮肉を言うと、机にある茶色の箱に入った八つのチョコレートのうち、一つを手に取り口にした。パシュコは拳銃で撃たれないことを願い、遅れた理由を話した。

「すみません、ゼウスさん。実はトラックで事故を起こしてしまっ

て、でも弁償はしま」

パシユコが話し終える前にゼウスが口を開いた。

「お前の給料じゃ！二百年以上かかる、貸せ」

パシユコは言われた通り、恐る恐るアタッシユケースゼウスにわたした。ゼウスはそれを手に取り、中身を取り出した。

「純兵器級プルトニウムだ、金で買えるような物じゃねえ。お前は俺達がこれを手に入れるのに、どれだけの廃棄潜水艦を探したと思ってるんだ！」

ゼウスはそう言うと、机の上の拳銃をとりパシユコに向けた。ゆっくりゼウスは近づき、銃口をパシユコの眉間にあてた。

「この組織はバカばかりだ」

ゼウスはそう言うと、左手に持っていたプルトニウムをパシユコの目の前に持ってきた。

「これが無事だった、それに今日は特別な日だ。だから見逃してやる。出ていけ」

パシユコはホツとし扉を開けようとした時ゼウスが、

「しかし、トラックは弁償だ、お前の給料から引いておく」
「分かりました」

パシユコは部屋を後にし、足早に去っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7220z/>

DEVGRU RED TEAM

2011年12月24日01時04分発行